

〔枕草子十一〕みなみの院の北おもてにさしのぞきたれば高つきどもに火をともしてふたりみたりよたりさるべきどもち屏風ひきへだてつるもあり几帳なかにへだてたるもあり

〔調度歌合〕一番 左 とうだい

えらせばやくる宵ごとくに灯火のあかしの浦にもえわたるとも

〔羅山詩集五十九器用〕三品羽林源君賜書燈臺于函三乃作詩以謝奉之余亦次韻

一隻高檠入陋廬照顔古道聖賢書細看字字行行際挑盡油油滴滴餘人以昏明應用捨誰於晝夜做

親疎手中既有青藜杖更採香芸拂白魚

〔駿臺雜話四〕燈臺もと暗し

宵の間過る程こゝにありて御物語承らんとて各坐につきけりえばらくありて燭もて至りぬるに翁ふとおもひよりしまゝ燭臺をさして世俗の諺に燈臺もと暗しといふはいかやうの事にとへていふにやあらんをのくいふて見給へとあれば座客の中ひとりいひけるは世に何事にもあれ外にはかくれなき事を其もにてきけば却て分明ならぬやうの事にかく申ならし候略

燈籠
名稱

〔倭名類聚抄十二燈火器〕燈籠 內典云燈爐見唐式云燈籠元式本朝式云燈樓見主殿寮式今按

〔箋注倭名類聚抄燈火器〕按原書云善男子譬如男女然燈之時燈爐大小悉滿中油隨有油在其明猶存若油盡已明俱盡其明滅者喻煩惱滅明雖滅盡燈爐猶存玄應曰爐又作爐同然則燈爐謂燈

之承油者非燈籠燈樓之類略按毗奈耶雜事云苾芻夏月然燈損虫佛言應作燈籠以竹片爲籠

薄氈遮障此若難求用雲母片此更難得應作百目令瓦師作如燈籠形傍邊多穿小孔略按燈樓

以木作之其形方而上如雨下屋燈籠以竹作之如毗奈耶雜事所說燈爐燈之承油者三物各異源

君爲通稱非是